

南極OB会 会報

No. 17

発行 南極OB会
会長 国分 征
編集 広報委員会

目 次

口絵写真 53次隊のミッドウィンター祭・・・1	
昭和基地便り	
第53次越冬隊のミッドウィンター祭・・・・・・2	
2012年度OB会総会開催・・・・・・3	
新会長挨拶・・・・・・5	
会計収支に関する資料・・・・・・6	
第10回「南極の歴史」講話会開催・・・7	
6次隊昭和基地戸締りの顛末 柿沼清一・7	
7次隊本格観測の幕開け 国分 征・・・9	
南極観測再開の裏話 中尾正武・・・10	
第53次南極観測協力行動顛末記	
砕氷艦しらせ艦長 中藤琢雄・・・11	
連載支部便り⑬（九州支部）	
白瀬100周年記念事業に参加して・・・13	

兵庫県あさご芸術の森美術館での 南極展・・・15	
連載「帰国後の各隊の動き」	
第11次南極観測隊OBにかほ市訪問・・・16	
新刊紹介	
未踏の南極ドームを探る	
ー内陸雪原の13ヵ月・・・・17	
会員の広場	
会員経営のお店紹介/旬菜厨房八十八・・・18	
訃報・・・・・・19	
アーカイブ委員会からのお知らせ・・・19	
南極教室委員会からの報告・・・・20	
広報委員会からのお知らせ・・・・20	



ミッドウィンター祭を楽しむ第53次南極観測越冬隊員（昭和基地）

第53次南極越冬隊のミッドウィンター祭

2012年6月19日、まったく日が昇らない極夜の「夕方」、昭和基地管理棟前に作られたアイスドームへ第53次越冬隊員たちが集まってきます。アイスドーム内にはアイスブロックのカウンターが作られ、隊員たちは思い思いに飲み物を楽しんでいます。隊員たちが集まったところ石沢越冬隊長と宮下実行委員長のあいさつに引き続き、集まった全員によりカウントダウン。第53次隊にちなんだ午後5時30分、第53次隊のミッドウィンターフェスティバルの開会式です。スローガンは「No Limit～技を磨いて 寒さに遊ぶ～」。

前日の18日まではブリザード、19日は地ふぶきが残りましたが、次第に風はおさまり晴れ、基地の各所での除雪作業とその後の餅つきで汗をかいたのちの開会でした。



セレモニー開会式挨拶（石沢越冬隊長）

この開会式会場のアイスドーム、越冬隊員全員がはいれるアイスドームをつくりグリーティングカードの撮影をしようと5月下旬から作成に取りかかりました。グリーティングカードは、インターネット環境が整った今、電子メールにて画像ファイルが各基地間で交換されます。撮影は6月4日15時ごろだったのですが、この日は快晴

でダイヤモンドダストが舞い、昼には極夜に入って出てこないはずの太陽が蜃気楼のいたずらで出てきました。気温は -30°C を下回り、この日は6月として過去4番目に低い日最低気温 -37.8°C を記録した日でした。アイスドームでおおわれているとはいえ内部もかなり寒いくつもの撮影衣装パターンを用意していたのですが、もっとも薄着のものは省略しました。

さて、開会式のあとは、管理棟食堂で調理隊員による中華料理のバイキング、アイスドームでの“アイス Bar”で前夜祭を楽しみ、いよいよ翌20日はミッドウィンターフェスティバル1日目です。ミッドウィンターフェスティバル本祭は22日までの3日間、23日は片付けと閉会式です。

ミッドウィンター期間中は、居住棟階（1居1階、1居2階、2居1階、2居2階）対抗でいろいろな競技が開かれます。競技は、肝試し+オリエンテーリングの「きもエンテーリング」、管理棟非常階段から男性は上半身裸、女性はTシャツで出題の「耐寒ジェスチャー」、綱引きや障害物競走など「雪上大運動会」、かくれんぼやクイズ大会の「室内競技」、四文字熟語のお題にしたがって起承転結の曲をえらんで「歌って踊って愉快な曲夜」、意趣を凝らして撮影したショートフィルムコンテスト「SSS(Syowa Short Short)」などなど、実行委員や関係、スポーツ係などが企画を練ってたくさん用意されました。これらの競技の順位から各居住棟階に点数が配分され総合順位が決まります。また、競技ではないイベントもあり、個人の芸やグループを作って練習した芸を披露する「ちょっとした芸だヨ！全員集合」、深夜の名作映画上映「レイトシアター」「ミッドナイトシアター」、毎晩の自主バー、利き酒大会など盛りだくさんです。



食事を楽しむ隊員たち

食事は、20日のディナーは篠塚シェフ、22日のディナーは井口シェフによる2回のフレンチフルコース、給仕は各シェフ所属の居住棟のメンバーで行われました。もちろん料理を堪能する隊員たちは久しぶりのスーツ姿です。他の日のディナー21日と23日は各居住棟別に腕をふるい中華とカレー。朝と昼の食事は、ブランチを各居住棟階で順番に準備しました。1日目は旧娯楽棟前にピザ窯をつくり思い思いのトッピングで焼くピザ Cafe、2日目はファストフード風“SyoWanald's”、3日目はバーを

利用したモーニング Cafe、基地内ラジオからは隊員がリクエストした BGM が流されます。最後の片付日はつかれた胃にやさしくお茶漬け、各居住棟階でいろいろ工夫され変化に富んでいます。

23日の片付日には、管理棟下に露天風呂が用意されました。しかし、本祭期間中ずっとよかった天気も最後までもたず風が強くなり、ついに11時には吹雪となってしまう、準備が滞ってしまいます。お湯の温度もなかなか上がらず、予定より少々遅れてのオープンとなっていました。露天風呂を楽しむ時間が少し短くなってしまいましたが、みな南極の空の下で疲れを癒し、無事閉会式と相成りました。閉会式では競技とショートフィルムの表彰が行われ、5日間のミッドウィンターフェスティバルが締めくくられました。

5月10日に開催された第1回ミッドウィンターフェスティバル委員会から約ひと月半、第53次隊越冬隊員みんなが、全力で手を抜かず準備を行ない実施し、そしてとても楽しみ満喫したミッドウィンターフェスティバルでした。(藤田 建)



2012年度OB会総会開催

ミッドウィンター祭、第10回「南極の歴史」講話会同時開催

2012年度南極OB会総会が6月23日(土)、午後4時、日本大学理工学部(6階)において開催された。また、総会に先立ち13時30分より、一般公開による第10回「南極の歴史」講話会が同会場で開催された。総会終了後、ミッドウィンター祭が同会場2階の「カフェテリア」で盛大に行われ、昭和基地からのメッセージも披露された。

南極OB会総会開会

冒頭で、川口貞男南極OB会会長が開会を宣言され、過去1年間の物故者の名前を読み上げ、1分間の黙祷を捧げた。引き続き、会則第11条に基づき、総会議長として、松原廣司氏が指名された。議事次第が確認され、議事進行に入った。



総会議長に選出された松原廣司氏

1. 活動報告

(1) 一般報告

・運営委員会（神田啓史運営委員長）

2012年度の南極OB会総会を、本日、6月23日、開催した。南極OB会運営委員会は月1回（第3土曜日）で、第49～60回を開催した。運営委員会の議事録は各支部長にメールで送付した。運営委員会は広報委員会、アーカイブ委員会、記念事業委員会、南極教室委員会との合同で開催。「南極の歴史」講話会は第8～10回を開催した。その他、第53次南極観測隊壮行会を2011年11月2日開催、2012年ミッドウインター祭を本日、6月23日に開催した。昨年度に引き続き、白瀬南極探検隊100周年記念事業を実施した。



報告する運営委員長 神田啓史氏

(2) 各委員会報告

・広報委員会（柴田鉄治広報委員長）

OB会会報第14～16号を発行した他、ホームページについては「白瀬100周年記念プロジェクト」への直接リンク、「南極の歴史」講話会の記録、「南極つながりレポート」のページを新規に作り、トップページからのアクセスを容易にした。今後は、会員間で情報共有できる環境の構築を目指す等の報告があった（なお、この1年間のホームページのアクセス数の変化が示された。アクセス数にはテレビドラマ「南極大陸」などの影響がうかがえた）。

・南極教室委員会（里見穂委員長欠席のため、神田委員長が代行）

昨年、南極教室講師の登録をし、約90名の会員から再登録の申し出があった。白瀬南極探検100周年記念事業の一環として、白瀬南極出前講座を10か所の小中学校等で実施し約2,400名の児童・生徒

が受講した。昨年度は全体で13件の南極教室を実施した。今後も講師派遣にご協力をお願いしたい。南極教室実施概要がリストで示された。

・アーカイブ委員会（小野延雄委員長）

提供資料の受入れ、ISS（市川市）保管資料の整理作業、国立極地研究所アーカイブ室との連携等について報告した。今後の方針を図で示しながら、アーカイブズの受け入れを会報に掲載していくことが報告された。

・南極OB会白瀬南極探検100周年記念事業委員会（渡辺興亜幹事）

事業委員会総会を2012年5月26日（土）、1330～1500開催した。挨拶の後、南極OB会白瀬南極探検100周年記念事業報告（渡辺興亜氏）、東京講演会報告（神田啓史氏）、各種小委員会・研究会報告（記念品企画、「南極記」勉強会、「白瀬検定」編集、ドキュメンタリー「白瀬南極探検隊の記録」、委託事業報告（極援隊KK石本恵生）があった。

続いて、吉村愛一郎氏（11次越冬、15次夏、元国土地理院）による講演会「ロス海の地磁気偏差問題」が開催された。その他、本事業に関わる二つの出版、「白瀬蠡」（井上正鉄、成山堂）、南極探検船『開南丸』『野村直吉船長航海記』（出版委員会、成山堂）について紹介があった。

2. 審議事項

・2011年度収支決算報告（田中洋一会計担当）について報告（資料1、資料は6ページ）、また、6月1日付けで、小疇尚監事により会計監査の点検が実施され、すべて正確に管理されていることが確認された。賛成多数で承認された（資料2）。



会計報告をする田中洋一氏

・2012年度の活動計画（運営委員長）について報告があった。年3回のOB会会報の発行、観測隊壮行会、総会・ミッドウィンター祭、年3回の「南極の歴史」講話会の開催、各委員会の活動推進の他に、支部事業（講演会等）の賛助、会員間連絡の強化（HPの充実等）、事務局体制の強化、白瀬南極探検100周年記念事業の継続について提案され、賛成多数で承認された。

・2012年度収支計画（会計担当）について提案があり、賛成多数で承認された（資料3）。

・2012年度運営体制（運営委員長）について、一部を除いて、ほぼ昨年度と同様な運営体制で進めることが提案され承認された。その後、川口貞男会長から今期で会

長を辞任したいという意向が示され、かつ川口会長からは副会長、評議員等と協議した結果、国分 征氏を次期会長に指名したいという提案があった。審議の結果、賛成多数で承認された。

国分征新会長より挨拶（挨拶の内容は下記に）があった。会長以下の運営体制は新会長のもとで、見直す必要が出てくるが、しばらくの間はこれまでとほぼ同じ体制で実施することが確認された。

松原議長は総会のすべての報告事項、審議事項が終了した事を告げ、閉会した。総会閉会后、ミッドウィンター祭が同会場、2階のカフェテリアで17時頃、開催された。

新 会 長 挨 拶

国分 征（7W、13W、18S、32S）



新南極OB会会長 国分 征氏挨拶

2004年11月に発足した南極OB会が中心となって行った南極観測50周年記念事業終了後、2007年より、OB会は川口会長の下に会としての骨格が固められ、会報の定期的な発行、地方支部の拡充、「南極教室」や「南極の歴史」講話会などの講演会開催などを通じて活動してきました。また、2010-12年には、わが国の南極探検の大先達である白瀬南極探検隊100周年記念事業が計画され、国際講演会を含め地方支部における講演会などの記念事業が行われました。こうしたOB会活動をリードしてきた川口会長の後を受け、こ

の度、私が会長を引き継ぐことになりました。

OB会は、基本的には観測隊に参加した隊員はすべて会員であるとし、会の活動は会報の通信費を負担する登録者からの収入により維持される形をとっています。現在、通信費を負担している会員数は約800名であり、この会員数はほとんど横ばいの状態にあり、新しいサポート会員の加入は必ずしも増加の傾向にはありません。OB会のさらなる発展を考えると、広報活動のため会報や講演会活動の拡充が必要かと思われませんが、サポート会員の数は必ずしも十分とはいえない状況にあります。これまでは、50周年、白瀬100年事業などを柱とする、いわばイベントを中心として、会の発展を図ってきましたが、今後は、これまでのものに匹敵するイベントが考えにくくなってくると予想され、新たな発想が必要かと思われます。支部活動についていえば、まだ目が行き届いていない地域もあり、さらに拡充していく必要があります。OB会のポテンシャルをさらに高めるため、会員各位の忌憚のないご意見をお願いします。

2011年度収支決算書					
平成24年3月31日 (単位:千円)					
収 入			支 出		
	予算	決算		予算	決算
2011年3月末繰越		5,078			
2011年度通信費	2,700 (900人見込)	2,571 (853人)	会報発行関係費用	1,100	1,135
			事務室運営費	1,500	1,587
			交通費 (委員会等)	200	113
総会・杜行会	700	727	総会・杜行会	700	785
グッズ料金	150	3	グッズ経費	20	-
カレンダー	550	812	カレンダー経費	500	807
その他		1	慶弔関係費用	30	-
			予備費	50	-
収入計	4,100	4,114	支出計	4,100	4,427
			次年度繰越		4,765

資料1 2011年度収支決算報告

会 計 監 査 報 告
南極OB会会則第8条により、2011年度会計(2011年4月1日～2012年3月31日)について、2012年6月1日に監査を実施した。 金銭出納簿及び関係書類、預金口座通帳、振替口座管理状況等について点検した結果、すべて正確に管理されていることを確認したので報告します。 2012年6月1日 南極OB会 監 事 小崎 尚

資料2 2011年度会計監査報告

2012年度収支計画(案)			
平成24年6月23日 (単位:千円)			
収 入		支 出	
2011通信費 (900名)	2,700	会報発行関係費用 (年3回発行 振込手数料)	1,200
		事務室運営費 (検査料、通信費、事務用等)	1,500
		交通費	120
総会・杜行会	700	総会・杜行会	700
グッズ料金	150	グッズ経費	20
カレンダー	550	カレンダー経費	500
		慶弔関係費用 (会員関係弔電等)	30
		予備費	30
計	4,100	計	4,100

資料3 2012年度の収支計画



第10回「南極の歴史」講話会

(2012年6月23日(土) 13:30～15:30 日本大学理工学部)

= 『宗谷時代』 から 『ふじ時代』 へ =

南極 OB 会の総会に先駆けて13時30分から第10回目の「南極歴史」講話会が開催された。話題は、1962年に基地をいったん閉じた第6次隊から1965年に第7次隊が基地を再開するに至る歴史をひも解こうとするものである。はじめに、6次隊を代表して柿沼清一氏が「6次隊：昭和基地戸締り顛末」および7次隊の国分征氏が「7次隊：本格観測の幕開け」について講演した。続いて、中断期間に再開へ向けてどのような努力がなされていたかについて、元 NET 報道部の中尾正武氏により「南極再開の裏話」をお願いし、出席のOB達により、「あの時はこうだった」という状況説明がいろいろと披露され、歴史の裏を垣間見ることができた。

6次隊 昭和基地戸締りの顛末

柿沼 清一 (2S、3S、4S、6S、9W)



第10回南極の歴史講話会会場風景

第6次隊は、基地の撤収作業が主な任務であるので戸締まり隊と呼ばれているが、宗谷時代の締めくくりに大きな観測も行っている。6次隊の主要な任務を挙げると、

1. 第5次越冬隊員の収容
2. 基地の閉鎖
3. 一部器材の撤収
4. 35°E～45°Eの沿岸地域の航空写真撮影
5. 重力振子による重力測定

である。この方針に基づいて作業が進められたが、近い将来、昭和基地再開を前提

に撤収作業を行うように告げられていた。

撤収作業と同時に、空輸機動力が全面的に航空写真撮影に向けられ、また、2次隊から懸案の昭和基地における重力振子による測定が主要任務として挙げられており、遅まきながら、測地部門も締め括りができた。まさに「6次隊」様々の気分であった。

6次隊の構成は総人数18名で通常は越冬隊を含め36名程度であるのでずいぶん少なく感じた。空輸量が少ないとは言え、基地閉鎖作業、生活基地設営に関する多様な作業の分担など設営担当隊員は苦勞したと思う。基地から撤収する機材も多いので、宗谷で機材を受け取る隊員をこの18名の中から出すことは難しかったのではなかったかと思う。

基地での諸作業、宗谷での機材の受け取り、梱包など第5次越冬隊の全面的な協力を必要とした。

(撤収作業)

私の撤収作業の担当は、地磁気・高層物理関係の残留観測機器の観測項目ごとの梱包格納である。観測項目ごとに梱包格納の

予定であったが観測室が狭い上、観測機器、測定器、工具材料など各所に分散している。

国内で、小口 高さんと、越冬用の機材を選んだとき、何でも持って行こう、材料があれば何とかなると、壊れかかった時計まで入れたことを思い出した。一寸した観測器は手作りする時代でもあった。



講演する柿沼清一氏

観測項目ごとの梱包は効率的でないのでものがあるものから手当たり次第梱包し表面に名称を記入するようにした。器機は梱包材料でくるみ電気掃除機でエア抜きをするという簡単な方法である。梱包した観測機等は観測室の2段目以上の棚と、11号個室のベットに格納した。使用不能と思われるもの、整理中に壊してしまったものはそのまま通路においた。ラジウムコレクターは、宇宙線のニュートロンソースと共に犬小屋の通路においた。

何年か後に来る観測隊員はこの器機を使うだろうか、使うのであれば、ここで測定していた状態のままを保存しておいた方がよかったのではないかと、器機を片付けスペースができた観測室を見てそんな感じがした。

(航空写真撮影)

従来の経験からして、セスナ機の氷上発着基地付近の海水面が固くてパドルも発達せず、天候も比較的安定している12月が最適と考えられた。しかしその時期に活動できるように速く氷海に到達すると、基地の近くまで宗谷が侵入することは困難が予測されるので12月後半には氷海に到達するようになればと考えていた。そのころ、往路の寄港地をダーバン経由にすれば3日程度短縮できるという案もあると聞いたが、

重力測定には往復ともケープタウンに寄港し、観測に最低5日が必要条件であるのでこの案は問題にならなかった。

12月23日、氷縁到着、1月5日、基地まで115海里的地点を空輸拠点とする。1月6日から航空機・撮影機材・要員等を空輸し、航空機の組立て、滑走路の整備を行う。第1回の飛行は1月15日、14時～17時、プリンスハラルド沿岸地域の撮影を行った。その後撮影飛行条件は極めて良好で、一部に上層雲の範囲もあったが殆どが快晴で、風力もやや強い場合もあったが、5m/s程度の日が多く偏流測定も不要の場合が多かった。

1月24日、航空機の時間点検の際、発電機ベルトの損傷が発見されたため、飛行中止し、予備品空輸を待ったが基地撤収までに間に合わなかった。そのため、第10回目に予定されていた35°E～37°E区間と、昭和基地近傍の撮影は中止した。

基準点測量については、観測隊の行動範囲拡大とともに沿岸域を広く覆う小ないし中縮尺地図作成のために多くの基準点が設けられた。基準点測量は露岸単位で、太陽による天文測量とその近傍に基準点網を設置するもので、これらの基準点網を結合し、昭和基地の天測点を基準にした網構成型が望まれ、又、基準点網ができなければ、沿岸地域の中縮尺の地図作成に大きな影響を及ぼすことになる。しかし、三角測量では、海氷上に測点を設置する必要が生じるなど、三角網の構成は難しかったが、第4次観測以後の、電磁波測距儀の活用により、長距離の距離測定が可能になった。この電磁波測距儀により露岸相互の座標が結合され高精度の基準点網が構成されるようになった。

第6次観測までの実施量としては、垂直写真撮影区間総延長1700kmあまり、天測点を含む基準点設置点数は29点に達した。

第6次観測で30°E～45°Eの沿岸域が垂直写真で覆われ、また、骨幹コースを評定するための基準点は一応必要量まで設置された。ここで日本隊の活動舞台たる沿岸域の10万～20万分の1図化が可能と成った

(重力振子による重力測定)

1966年の南極会議及び国際重力会議

の両会議において重力振子による昭和基地の重力測定が決議されている。

Cape Town の重力値は第2次観測等で十分な精度で求められているので Cape Town を基準として昭和基地の重力値を重力振子を用いて求めるものである。往路の Cape Town における測定は宗谷の入港中の短い期間であったが順調に測定することができた。Cape Town の測定点は国際的な比較観測が行われている Trigonometrical Survey

Office Room No 2 5 である。

昭和基地の測定は、従来、ウオルドン重力計で測定されていた。天測点は重力振子による測定には不向きのため、富士見の間入り口から20mの露出している岩盤上を重力基準点として採用した。今回新設された昭和基地重力基準点は、重力値も十分な精度で求められ、露出岩盤に設置された数少ない永久的重力基準点の一つとして、南極地域の開発に十分役立ちうるものである。

7 次隊 本格観測の幕開け

国分 征 (7W、13W、18S、32S)

南極観測事業の再開

1962年5月学術会議は、I Q S Y (International Quiet Sun Year 静かな太陽観測年) への参加を目的とし、南極観測の恒久的国家事業として再開することを勧告した。1963年8月20日には、学界の一部からの根強い反対があったが、学術会議も防衛庁の協力を求め、観測船と航空輸送の担当は防衛庁とすることとなった。これにより南極観測再開が閣議によりが決定された。



講演中の国分 征氏

再開に当たっての基本的な方針としては、定常観測として恒久的に継続実施しうる体制（現業官庁）をとり、研究観測は広く学界に解放し高度の学術研究を行う形となった。1965年には、

- 1) ロケットによる超高層物理観測の実施、
- 2) 南極点往復調査旅行の実施、

3) 大陸内部の調査拠点の設置、および観測用航空機の昭和基地配備等を早期に実現を期する、

とする基本方針がとりまとめられ、これを観測再開後の指針とすることが決定された。

第7次隊の概要

再開第1年度の第7次隊の観測概要としては、主な設営作業として、基地復元作業、発電機と通信等の更新、雪上車実用試験(KD 601)が決まり、重点研究観測として、超高層物理部門、生物部門および海洋部門の3つの部門が取り上げられた。

超高層物理観測では、低周波自然電波、地磁気脈動、オーロラ電波雑音、宇宙電波吸収、オーロラフォトメーター、分光測光、オーロラレーダーなどの研究観測が加わり、定常観測としては、全天カメラ、磁力計、垂直打ち上げ電離層装置が整備された。生物部門では、昭和基地周辺の生態学的調査（コケ群落、微生物の生態）、大陸の土壤細菌、大気中の微生物調査、船上観測としては、プランクトン、海底の生物調査が行われた。海洋部門では、海洋物理観測と昭和基地における潮汐観測が実施された。気象観測では、自動気象観測装置、自動追跡高層観測装置が導入され、高層大気の熱的構造の特別観測（オゾンゾンデ、放射ゾンデ、露点ゾンデ）も計画された。

なお、7次隊の出発に先立ち、1965年1月には、ソ連の援助により松田（第5

次)、木崎(第4次)の両氏による昭和基地視察が行われた。

第7次観測隊の予定記録と題する、第7次南極地域観測村山隊長による記事が「極地1」(日本極地研究振興会1965年8月)に掲載されている。この村山隊長の予定記録によると、定着氷接岸は「66年1月13日とされていたが、65年12月31日には定着氷に着き、正月早々から作業が開始された。これは「ふじ」の砕氷能力とともに、氷状が良かったことにもよると思われる。この氷状は、逆に新型雪上車(KD601)の輸送に影響を及ぼした。当初は氷上輸送が予定されていて、オメガ岬などが偵察されたが、海氷状況が輸送には適さなかったため断念、結果的には「ふじ」の昭和基地接岸後に揚陸された。KD601を除くほとんどの物資は定着氷接岸地点から空輸され、その後に「ふじ」は初めて昭和基地に接岸した。

主な建物の新設は、発電棟(45kVA)飯場棟、送信棟、通信棟、電離棟、地磁気

変化計室の6棟だったが、通信棟、電離棟と地磁気変化計室は、南極観測開始当初に準備されたが、1次隊では基地へ持ち込めなかった建物である。

越冬観測に関わる観測装置は、直視磁力計など基地に残されていたいくつかの装置を再稼働せざるを得ないものがあったが、各部門とも大きな問題はなく、順調に推移しその後の観測につながる通年観測が実施された。KD601雪上車のテストについては、海氷の状況が安定せず、春先になるまで大陸への揚陸ができず、残念ながら長距離の走行のテストはできなかった。

越冬観測に参加した筆者の個人的な7次隊観測の評価としては、本格観測の幕開けと位置づけるよりは、6次隊以前の観測と8次隊以後の本格観測との橋渡しをする段階に位置づけることが妥当かと思われる。8次隊による食堂棟や観測棟の新設、雪上車や設営用車両の充実などにより、名実ともに本格観測が始まったというべきだろう。

南極観測再開の裏話

中尾 正武(元NET報道部)

日本の南極観測は、昭和35(1960)年の閣議で、第6次隊で打ち切りと決まった。同37年4月、「宗谷」は最後の航海を終え、帰国した。



講演中の中尾正武氏

基地再開、観測継続を願う関係者は多かったが、昭和基地の戸締り役を果たした第3次、第5次越冬隊長の村山雅美さんは、

特に再開への意欲を強く抱いていた。そして選び抜いた方法の一つが、自民党の実力者である中曽根康弘元科学技術庁長官、長谷川峻前文部政務次官(官庁名や役職名は当時のまま)をアメリカ科学財団(NSF)の招待の形で、南極大陸に送り込み、南極の実情と観測再開の意義を知ってもらうことであった。

米国の南極向け輸送機が発着するニュージーランドのクライストチャーチまでの往復旅費や滞在費などの経費が必要であった。村山さんは海軍予備学生時代の同期生が部長役でいるNET(現テレビ朝日)に話を持ち込んだ。そして山男であり、日本山岳会会員である報道部員の私が同行・取材を命じられたのであった。こうして中曽根、長谷川、村山、私の4人による南極行が始まった。

同年11月14日出発、バンコク、シドニー経由クライストチャーチに着き、3日

間待機のあと米国のソリ付き大型輸送機グローブマスターでマクマード基地に到着。出発前夜には盛大な壮行会を開いた。マクマード基地では占領軍で在日中に日本婦人と結婚したという人が面倒を見てくれた。

南極点の米基地には11月20日に着いた。南極点に日の丸が掲揚された。二人の代議士は、南極の壮大な自然に触れ、アメリカをはじめとする各国隊の活動ぶりをしっかり見聞して、12月6日に帰国した。

帰国した二人の活躍は目覚しかった。12月11日の自民党政調会の文部、国防両部会

と科学技術特別委の合同会議が早くも開催され、昭和基地の再開、同基地の永久化、などが議論されている。

38年度予算には、再開予備費として5千万円が計上された。そして新砕氷船の建造計画、輸送担当は防衛庁などが決まってい

き、38年8月20日の閣議で観測再開が正式決定した。
第7次隊を乗せた新砕氷船「ふじ」が出港したのは、昭和40年11月20日である。4人が南極に向かってから3年後のことであった。（深瀬記）



第53次南極観測協力行動顛末記

砕氷艦しらせ艦長 中藤琢雄

（現海上自衛隊第1術科学学校教育第2部長）



昨年11月11日、第1次の宗谷の出港時と同様に、雨の東京晴海埠頭出港から始まった第53次南極地域観測協力行動は、予想もしなかったような経過をたどったものの、当初の計画どおり4月9日の帰国をもって終わることができました。

今振り返ってみても、今次行動はまさに南極の自然の厳しさを思い知らされた行動であり、いかに強力な「しらせ」をもってしても歯がたたないことがあるとわかった行動であったと思います。

昨年12月14日、リュツォホルム湾沖の海水に進入して南下を始めた途端、猛烈な地吹雪に見舞われて視界が利かず漂泊を余儀なくされ、収まってみると、はるか水平線まで見渡す限りの乱氷域に周囲を覆われて前進も後退も阻まれてしまいます。

昭和基地までの燃料を確保しておく必要から、しばらくは冰山とともに西に東に流されるままの漂流状態となって、ただただ氷に緩みが生じる「天の時」を待つこととなりました。このため、定着氷域に入ってから実施する予定でいた昭和第1便や準備空輸も、今回は昭和基地から50マイル以上離れたこの流氷域から実施することとなりました。

1月4日、氷状偵察の結果、周囲の氷に

緩みが広がっているのを確認できたため、待ち望んだ「天の時」到来と判断して氷海航行を再開、少しずつ開き始めた氷の裂け目に船体をこじ入れる様にして南方に流氷域を脱し、フローリードを利用してようやく定着氷域に到達しました。しかし、今回はそこから先も予想以上に厚い氷と積雪によって進出を拒まれ続け、昨年よりはるかに多い2000回以上のラミングを繰り返しても昭和基地はおろか弁天島付近にさえ到達することができず、53次隊長と協議のうえ、1月21日の現地時間午前12時をもって接岸は断念すると決定しました。そして1月24日、昭和基地から直線距離で11マイルの地点にアイスアンカーをとり、ここを終着点として昭和基地への輸送を開始することとなりました。

停留後の氷状調査の結果、停留付近の氷厚は5mから6m、場所によっては6m以上、積雪は2m近くもあり、改めて今後は昭和基地接岸が困難であることを実感しました。

昭和基地へ接岸できない場合の物資および貨油の輸送要領については、必要性は認識したものの、観測隊側もわれわれ「しらせ」側も「まさか、着けないことはないだろう」と、氷海に入るまで具体的なことは

ほとんど準備していませんでした。このため、空輸についても氷上輸送についても、あらかじめ出来上がった輸送計画というものはなく、何をどのように輸送するかを観測隊と一緒に日々検討しつつ進めていくことになりました。今回は年末に想定外で約2週間漂泊することになりましたが、少し危機感の高まってきたこの時期がもつぱらこの検討、調整に使われたことは不幸中の幸いだったように思います。



アイスアンカーを取った「しらせ」

そして、白夜も終って不順な天候が多くなる1月下旬から、天気の手許限り朝から日没近くまで航空輸送、引き続き氷点下10度以下となる深夜までの氷上輸送、物資と貨油の並行輸送、送り込みと持ち帰りの同時輸送と、信じられないような過酷な日程を観測隊員と「しらせ」乗組員が一丸となってやり抜き、2月10日までの約2週間で、なんとか越冬隊が必要とする物資および貨油の輸送を完了させることができました。

今回は、輸送用航空機が1機の搭載であったため、単純に考えても2機搭載した52回と比較すると半分の飛行時間しかありません。さらに、今回は、昭和基地に接岸した場合に比べると輸送に要する飛行時間は10倍以上となったため、越冬成立と大型大気レーダーなど重点観測に必要な物資の輸送は航空機だけでは達成することができず、氷上輸送が実施できるということはいへんおおきな意味をもっていました。とはいえ「しらせ」と昭和基地間の氷上輸送は30km以上に及ぶ海水氷ルートを通る

こととなり、氷上輸送を担当した隊員はさぞかし神経を使う業務だったろうと思います。

2月13日、停留地を出発して日本に向け北上を開始しましたが、ここでも厚い氷と雪に阻まれてラミングの進出がほとんど得られず、さらにラミングでの後進中に後方で剥がれたと思われる氷塊が船体に圧着して右舵を損傷、修理不能としてしまいました。以後左舵だけで航行を継続しましたが、このようなこともあって、進路を東から北に向けるだけでも数日を要し、また、その後も悪天候に度々遭遇したため、復路も往路と同様たいへん厳しい砕氷航行を強いられました。

1日あたり150km程度の進出距離から始まった復路の歩みは、約20日間を経過した3月3日の夜にようやくリュツォホルム湾沖の流水縁に到達して、氷海を離脱することができました。氷海内滞在日数は82日間、往路と復路を合わせた総ラミング回数は33次の記録に次ぐ4231回に達しました。

氷海離脱後は可能な範囲で海洋観測を実施しつつ何とか日程の遅れを取り戻すことができ、3月17日フリーマントルに寄港して観測隊員を退艦させることができました。

今次行動中で何よりもありがたかったことは、氷海内で行動期間中に52回越冬隊員、53回観測隊員そして「しらせ」乗員の誰一人として大きな病気や怪我をしなかったことでした。これは、今回搭載している輸送用航空機は1機のみであり、また、厳しい氷状のために艦を自由に動かすことができない状況が続いたため、病人やけが人が発生しても近傍の港湾へ緊急搬送できない恐れが高かったからです。

その後、4月9日には予定どおり桜花咲き誇る晴海埠頭に戻ってくることができましたが、今回の行動では国内の多方面にわたる関係の方々に多大なご心配をおかけすることになってしまいました。当時の「しらせ」艦長としてこの紙面をお借りしてお詫びするとともに、行動中にみなさまから戴いた多くのご声援に篤く御礼申し上げます。たいへんありがとうございました。



連載 支部便り⑬ (九州支部)

白瀬 100 周年記念事業に参加して

九州支部幹事長 坂 翁介 (29W)

九州支部の白瀬 100 周年記念事業参加は 2011 年 2 月 5 日の支部幹事会から始まります。この年の 3 月 30 日に松本支部長がご逝去されましたが、開催場所が鹿児島で可能という答えを幹事の宮田敬博氏より頂いた 4 月 10 日、残った幹事メンバーで 2 月 5 日の決定どおり事業に参加することにしました。7 月 8 日に 坂、下田、村上、宮田の幹事 4 名で鹿児島市教育委員会を訪問した際、鹿児島市立科学館で 2012 年の 4 月 28 日 (土) から 5 月 6 日 (日) までの 8 日間開催する事が決まりました。

鹿児島南極展の内容については宮田敬博氏によって以下に纏めていただきました。

九州支部主催「白瀬南極探検 100 周年記念南極展」は、鹿児島市立科学館との共催で同館の 3 階 4 階に展示を行い、5 階宇宙劇場 (プラネタリウム) で記念講演会を行うという形で、平成 24 年 4 月 28 日 (土) ~ 5 月 6 日 (日) (5 月 1 日の休館日を除く 8 日間) 開催した。



白瀬探検隊タペストリーに見入る来館者

科学館 3 階の企画展示室には白瀬南極探検隊記念館からお借りした白瀬南極探検隊タペストリーや歴代南極観測船のタペストリーを展示し、開南丸と命名した東郷元帥についても鹿児島水交会や自衛隊鹿児島地方協力本部の協力でパネルを作成し展示した。極地研から借用した新しらせや雪上車 (SM100) の模型、昭和基地ジオラマの横にはインターネット上の昭和基地ライブ映像や転がる太陽・沈まぬ太陽の動画が見られるようにした。プロジェクターで「白瀬南極探検隊の記録」を上映し、さらに出

航から昭和基地到着までの航海の様子もビデオ上映した。

またこの企画展示室では毎日午前午後の 2 回、「南極 OB が語るそれぞれの南極物語」と題したミニ講演会も開催した。4 月 28 日のオープニングイベントには極地研から隕石学の小島秀康教授をお招きし隕石の話をしていただき、以後九州支部の坂幹事長や下田幹事にも加わってもらい鹿児島のメンバーで日替わりでミニ講演を行い、最終日の 5 月 6 日には東京から駆けつけていただいた南極 OB 会記念事業委員会会長の渡辺興亜氏にも講演していただいた。

ミニ講演のあとには「南極の氷の音を聞いてみよう」というイベントを開き、来場者に氷に触ってもらったり、氷がはじける音を聞いてもらったりした。多くの方がコップを耳に当て、大昔の空気がはじける音に聞き入っていた。



氷の音に興味津々

科学館 4 階には南極観測に関する展示ス

ペースを作り、極地研究所から借用した資料やパネル、OB が持ち寄った資料を中心に展示した。

装備では羽毛服や防寒靴を展示し、靴底の厚さや中敷の厚さに驚く人が多かった。

生物関係では剥製（アデリーペンギン親子、トウゾクカモメ、ウェッデルアザラシの子供など）、ショウワギスやライギョダマシ、イチレツダコ、ナンキョクツキヒガイなどの魚貝類、地衣類などを展示した。またペンギン・アザラシなどのビデオも上映した。コウテイペンギンのフリッパーに触り、その硬さに驚きの声があがったり、赤い血液を待たないニラミコオリウオなどが興味を引いていた。



ペンギンのひなは子供たちに人気

宙空関係ではオーロラの写真やパネルの展示を行い、部屋の片隅を暗幕で区切ってオーロラシアターも作り、オーロラのビデオを上映した。またオーロラのロケット観測に関係し、JAXA の内之浦宇宙空間観測所からロケット打ち上げのパネルを借用し展示した。

雪氷では氷床コアのレプリカを展示し、氷床掘削のビデオを上映した。

気象では鹿児島地方气象台から借用したパネルも展示し、科学館の-20℃の低温室も体験できるようにした。

地学では鹿児島初公開（九州初公開？）となる貴重な月隕石、火星隕石、小惑星ベスタ由来の隕石の他、様々な隕石や岩石、化石など極地研から借用した資料に加え、OB が所有していた岩石などを展示した。蜂の巣岩やざくろ石など大きいものは自由に触れられるように配置し、多くの方が鉄隕石の重さや鉄の匂いに感動したり、月隕石 1 個で家が建つかもという話に興味深く聞

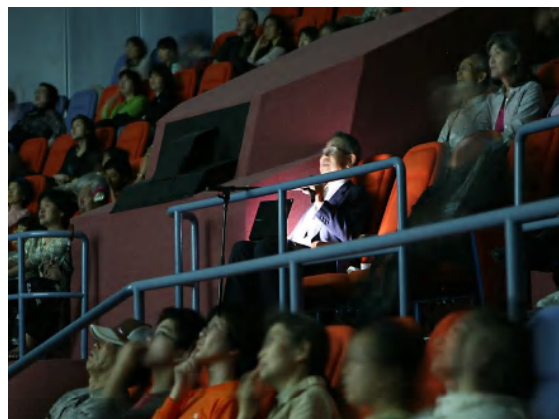
き入ったりしていた。ガーネットサンドや石膏の結晶も自由に触れるようにしていたが、下田氏所有の石膏の結晶は子供たちにむしられて、一回り小さくなってしまった。（下田さん、すみません。）



岩石の解説をする鯨島氏

以上の展示場では、OB が交代で詰め、また鹿児島大学の学生ボランティアの応援ももらって、会場の安全管理と展示物の解説などを行った。

期間終盤の 5 月 5 日午後には科学館 5 階宇宙劇場（プラネタリウム）に於いて、南極展開催記念イベントとして「映画と講演のつどい」が開かれた。一般市民 182 名と九州各地から集まった南極 OB が、科学館に準備していただいた大型ドームシネマ「南極大陸」の迫力映像を楽しみ、それに引き続き北村泰一氏の記念講演に聞き入った。



講演中の北村氏

「白瀬探検隊なかりせば、現日本南極観測隊あらじ」と題した北村氏の講演は白熱し、

科学館副館長が巻きを入れる程であった。講演終了後には南極観測船の船番号にちなみ 5003,5002,5001 人目の入館者と講演会参加者 107 番の方に記念品贈呈が行われた。

記念撮影のあと、鹿児島サンロイヤルホテルに会場を移し、九州支部懇親会を科学館館長・副館長と学生ボランティアの諸君、北村氏の講演イラストを書いていた南野尚子氏を招待して行った。近況の報告や歓談をし、最後は若い学生諸君のエネルギーももらって、楽しい夜を過ごした。

期間中の入館者総数は 5584 名であった。晴天日が多く、入館者数が伸び悩んだが、雨の 4 月 30 日には 1 日で 1212 名の入館者があるなど、多くの市民に南極に触れてもらえたものと思う。4 日連続で鹿児島市外からひとりでやってきた小学校 5 年生や 家族で旅行に行く予定を変更して 3 日間もきた中学 3 年生、南極に行くためにどういう進路をとるべきか相談にきた獣医学科の学生・・・、そういう子供たち、若者たちに何かしらのプレゼントができたのではないと思う。

今回の鹿児島南極展ではその企画から会場準備、会場案内係、ミニ講演、撤収作業までを、鹿児島在住の南極 OB 会メンバー、鮫島（5、6 次宗谷）、西牟田（8、14 次越冬）、戸柱（25 次越冬）、市川（29 次越冬）、森本（31 次越冬）、角（34 次越冬）、新川（37 次越冬）、山中（37 次越

冬）、宮田（39、44 次越冬）、内野（44 次夏）、および立元（鹿児島水交会）、山之内（しらせ乗組員）の 12 名が中心となって行った。同じ鹿児島県内に住みながら今まで面識のなかったメンバーであるが、今回のイベントを通じて楽しい時間を共有できた。今後も鹿児島では時々集っては、南極話に花を咲かせることになると思う。その意味でも今回のイベントは大成功であった。

最後に展示資料等を貸し出していただいた国立極地研究所・白瀬南極探検隊記念館・みのつる資料館ほか各 OB の皆様、資金援助をしていただいた日本極地研究振興会のほか、後援いただいた鹿児島水交会、自衛隊鹿児島地方協力本部、鹿児島県教育委員会、鹿児島市教育委員会、鹿児島県校長協会、NHK 鹿児島放送局、MBC、KTS、KKB、KYT、南日本新聞社、それから寄付をいただいた JA 鹿児島県中央・一鶴同窓会・鶴丸同窓会ほか多くの皆様、講演をしていただいた皆様、ボランティアの皆様、共催していただいた鹿児島市立科学館、本当に多くの皆様のお世話になり、このイベントを行うことができました。さらに貴重な写真を提供いただいた田之畑一男氏（6 次夏）など多くの方からも応援メッセージを頂きました。この場をお借りして感謝申し上げます。（宮田敬博記）



兵庫県あさご芸術の森美術館での南極展

柴田鉄治（7S、47S）

兵庫県朝来市のあさご芸術の森美術館で、2012 年 7 月 14 日から 8 月 26 日まで南極展が開かれた。国立極地研究所の協力で、昭和基地やオーロラの写真をはじめ、南極で見つかった隕石の実物や氷山の氷の展示など、なかなか立派な南極展だった。

あさご芸術の森美術館のある朝来市多々良

木というところは、姫路から JR 播但線で約 1 時間、水力発電所のダムのおもとに広がる自然の美しいところだ。近くに生野鉱山や竹田城跡など歴史的な名所も数多い。

冒険家の植村直巳さんは隣町の豊岡町の出身で、南極大陸横断を企画していた植村さんの衣服や装備品も南極展に展示されていた。



氷山のつぶやきに耳を傾ける子供たち
(あさご芸術の森美術館提供)

また、朝来の和田山といえ、1880年（明治13年）に巨大な「竹ノ内隕石」が落下したところとしても名高い。日本で最初の隕石標本として研究者に寄贈されていたが、

それも今回初めて「里帰り」して、南極展に出品されていた。

南極展に私の写真も展示された縁で、初日とお盆休みの日に私も招かれ、「ジャーナリストが見た南極」と題して講演会を開いた。やや失礼な言い方かもしれないが、私の第一印象は「こんな田舎に、こんな立派な美術館があるとは」という驚きであり、次いで「こんな立派な南極展が開かれ、こんなに大勢の人が講演会に来てくれるとは」とあらためて感激した次第である。

あさご芸術の森美術館によると、会期中の入場者は4200人にのぼり、他の特別展より大幅に上回る入場者だったという。とくに来場者の関心を集めたのは、初めて里帰りした「竹ノ内隕石」と南極の氷山の氷で、「氷山のつぶやき」に耳を傾ける人が多かった、と話している。



連載「帰国後の各隊の動き」

第11次南極観測隊OBにかほ市訪問

—白瀬日本南極探検隊100周年を記念して—



第11次南極観測隊OB仲間
(浄蓮寺の南極探検隊長白瀬中尉銅像前で)

第11次南極観測隊のOB仲間では「泊りがけの親睦旅行」が毎年の恒例行事になっています。2010年度はOBの一人（福西

浩）が日本学術振興会北京センター長をしていたことから5月に北京にまで出かけ、中国国家海洋局極地考察弁公室を訪問し、中国の南極関係者との親交を深めました。2011年度は白瀬日本南極探検隊100周年を記念して9月30日～10月2日に秋田県にかほ市を訪問しました。この旅行では秋田の南極関係者がいろいろとご親切に対応してくださいました。特に南極OB会秋田支部の井上正鉄氏（支部長、秋田大）と坂中伸也氏（秋田大）、南極探検隊長白瀬轟頭彰会事務局長の小柳伸光氏には大変お世話になりました。

にかほ市金浦では最初に白瀬轟の生家である浄蓮寺を訪問し、両脇にペンギン像が配置された南極探検隊長白瀬中尉銅像を見学した後、白瀬南極探検隊長之墓にお参りしました。また金浦湾頭の灯台に近い沖の

島公園にある南極探検隊長白瀬轟君偉功碑も見学しました。この碑は1934年（昭和9年）に金浦文化協会が郷土の偉人をたたえて建立したものだそうです。この後、にかほ市黒川にある白瀬南極探検隊記念館を訪問し、開南丸の復元模型や第9次観測隊が極点旅行に使用した雪上車などを見学しました。また仁賀保高原の風力発電機群にも立ち寄り、その一角で試運転が行われている昭和基地用の風力発電機を見学しま

した。そして夜は乳頭温泉にある秋田大学乳頭ロッジに泊めていただき、素晴らしい温泉と食事を満喫させていただきました。翌日は男鹿半島入道岬まで車で案内していただきました。村山雅美極点旅行隊長が最も好んだ食事処「美野幸」の真鯛の石焼定食を私たちにも味わってほしいとのご厚意からでした。白瀬中尉の偉業と村山隊長の極点にかけける熱い想いを改めて振り返ることができ、思い出深い旅になりました。



新刊紹介

「未踏の南極ドームを探るー内陸雪原の13ヵ月」

あげた
上田 豊著

著者は、氷河研究を専門とする名古屋大学名誉教授である。日本南極観測隊の第10次と26次で越冬し、36次には観測隊長を務めた南極のベテランのひとりである。本書は、1984年11月からの第26次南極観測隊に参加し、みずほ基地での越冬を中心に、約13か月間を南極大陸上で過ごした記録である。

活動期間を以下の表題をもつ7つにわけて記述している（①～⑦）：

- ①「16年ぶりの南極へ」：砕氷艦「しらせ」の船上生活35日間。
- ②「夏 あすか新拠点」：昭和基地から南西に約750 km離れた「あすか基地」建設の15日間。この基地はのちに28次隊から続く5回の越冬に使用され、隕石探査の拠点として多くの成果を上げている。
- ③「秋 前進拠点の建設へ」：5人で行なった「前進拠点」建設の約60日間。前進拠点とは、立案中の「南極氷床深層掘削プロジェクト」で舞台となるドーム地域の探査に備え、「みずほ基地」からさらに500 km 内陸に離れた位置に新たに設置する準備施設である。
- ④「冬 地吹雪のみずほ基地にて」：みずほ基地での約200日間、5人で過ごした生活。－60℃を超える極寒の時期に体験したという「雪震」は、温度の急変で起きる雪氷破断に伴う地震みtainな現象らしい。

極夜の大陸上という音も光もない静寂をイメージしがちのところ、自然の衝撃音が聞かれるとは意外である。

⑤「春 前進拠点で氷床を掘る」：「みずほ」での越冬を終え、8人での旅行と野外活動の40余日間。前進拠点で過去数千年間の気候を探る雪氷コア試料を採取した。

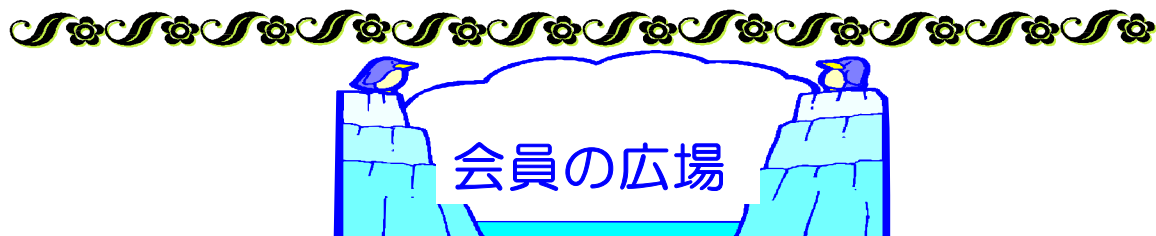
⑥「夏 ドーム頂上を探して」：「前進拠点」からさらに南下、5人編成による、未踏の高地への約50日間の旅行。ドーム地域の標高の最も高い地点の探索とルートを開拓。このドーム域ではのちに、1986年に32万年前までの、2007年には72万年前までの氷試料を取得した。今回の測量はその嚆矢となるものである。

⑦「あすか基地へルートを開く」：「前進拠点」から「あすか基地」までの、危険なクレバス帯を安全に抜けるルート開拓の約50日。これにより、昭和基地とあすか基地は初めてみずほ経由の陸路で結ばれ、28次隊からの「あすか基地」での越冬の一つの条件整備ができた。

本書の随所にみられる各種の調査や観測についての記述は、平易でかつ適度に詳しく、地球化学や気象学、雪氷学など地球環境の研究が、こうした厳しい極地での活動に支えられているという事実をわかりやすく伝えている。過酷な条件下での少人数の行動は、野外観測にはつきものである。最

大限の科学成果を上げるためには、滞在中の生活上のリスク回避とストレス解消のために様々な知恵を働かせなければならない。本書はそうした点について、多くの示唆に富む書になっており、野外でのオペレーションを計画する人の参考書として有用である。また、白夜の中で金色に輝く冰山、地平線のかなたまでどこまでも白く広がる大

陸上の風景、大陸沿岸からの昭和基地の遠景など、景色についての記述は、南極を経験したことがある OB 会員には、著者の美意識に共感しつつ、自らの過去の感動の記憶を再生するのに役立つだろう。ご一読をおすすめしたい(第19次越冬、伊藤朋之)。
(成山堂書店 2200円(本体価格))



会員の方々が経営するお店などの紹介

南極話をサカナに旨い料理と酒が楽しめる店
—「旬菜厨房 八十八」—

21次隊の調理担当になったのは、21歳の時。もともと料理人を目指して群馬から上京し、修行のために入ったのが東條會館。当時は東條會館から毎年のように観測隊に調理人を送り出していたから、その先輩たちの話を聞いて、僕もすぐに南極が目標になったんだよね。そして入社から6年目、ついに「次はお前の番だ」とお声がかかり、喜び勇んで南極へ行ったわけ。

越冬中で印象深いことといえば、駐機中の飛行機が氷が割れて海に沈んでしまったこと。自然って本当に怖いと思ったな。その一方で、きれいなオーロラを見せてくれたり、ペンギンやアザラシが人間をまったく警戒しなかったり。素晴らしい自然に出会えた感動もたくさん。どれもこれも南極に行かなくちゃわからない貴重な経験ばかりだよ。時には、包丁を工具に持ち替えて、雪上車のパンク修理や電気配線の手伝いも。そんな厨房を離れての仕事もまた、気晴らしになって面白かったね。

32年勤めた東條會館を辞めて、念願だった自分の店を7年前新宿にオープンしました。フレンチと沖縄料理の店「八十八(やそはち)」。店名は、「お米」の字にちなみつけました。この店一番の自慢はもちろん料理もそうだけど、何より観測隊 OBの皆さんが集まってくれることです。



八十八のマップ

最近は、食育を目的にした子ども料理教室を毎月開催。去年は震災の被災地に炊き出しにも行きました。避難所生活を送っていた方たちに、せめて温かいものや力のつくものをと、スープやステーキを提供しました。皆さんすごく喜んでくれて。あらためて“食”の力の大きさを感じたね。

料理人になって早40年。でもまだ55歳！実はもう一回くらい南極に行くチャンスがあるかな、なんて密かに思ってる。その時が来たら、店を閉めてでも行きたいよね。南極での1年4カ月、あの付き合いは親兄弟よりも濃い気がするし、何より男のロマンがあるから。南極は本当に特別な、本当にいい場所です。

(第21次調理 中村善昭氏談)

* * * アーカイブ委員会からのお知らせ * * *

今、皆さんの南極アーカイブズ（文書、モノ）を受入募集中

南極アーカイブズとは南極観測事業の活動のすべてを「記録（文書、モノ）」に集約することによって、過去から現在、未来へと時を貫くことが出来る継続的な保存資料のことをいいます。とくに南極観測の各観測隊次（以下、隊次と略する）の活動は南極観測事業の歴史の骨子となるもので、これを「記録」にして、国民の共有財産を永く保存することは、その隊次の文化、遺産を永久に残すことに繋がります。時にはこの「記録」を持って、南極観測を国民に分かりやすく、説明することが出来ます。南極観測は一種の国民的事業でもあり、組織、団体の資料ばかりではなく、個人が収集、保存した資料は南極観測の歴史を理解する上で極めて重要な意味を持っています。

南極 OB 会は平成 20 年 10 月より、南極観測 50 周年記念事業の一環として、南極観測に関するアーカイブズ収集、整理、保管の活動を開始しました。活動は南極 OB 会アーカイブ委員会の主導のもとに実施し、以下の受け入れ資料を常時、募集していますので、奮って、申し出てください。

・受け入れ資料

- (1) 隊次公用資料、隊員個人の私的資料
- (2) 隊次を超えた観測事業資料
- (3) 物故 OB 会員からの一括寄贈資料

・資料の種類

- (1) 記録資料（計画書、報告書、一般記録メモ、事業実施記録文書類、個人日記）等

- (2) 学術論文、報告書（観測、設営）、地図、設計図、スケッチ、音声テープ等
- (3) 映像資料（プリント写真、ネガ、スライド、映像フィルム、CD、DVD）等
- (4) 観測機材、観測道具、設営・装備品等

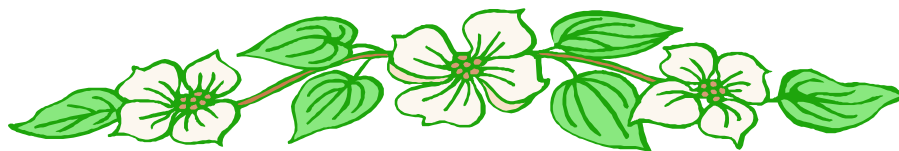
アーカイブ委員会で収集、受領した資料は、整理され、登録され、保存されます。整理された後、資料目録を作成し、その台帳は公開を原則としています。資料そのものも委員会の了解を得て、閲覧を可能にしています。

資料にはすぐに公開できない個人情報、守秘情報も含まれる可能性があります。保存はするが一般には非公開という資料も存在することをご理解ください。

既に受け入れた資料の保存は現在、千葉県市川市鬼高のアイ・エス・エス（ISS）鬼高センター及び南極 OB 会事務所に収蔵しています。近い将来は、南極 OB 会の収集資料の保存スペースには限界があるために、資料が整理された段階で、順次、国立極地研究所（立川市）のアーカイブ室保存庫に移管し、継続的価値のある資料として永久保存される予定です。同アーカイブ室も目録、資料の公開を原則としています。

この件に関するお問い合わせは、郵便、OB 会メール、電話、FAX 等でアーカイブ委員会宛（事務局、毎週水、金曜日）にご連絡ください。

（アーカイブ委員会委員長 小野延雄）



訃報

福原秀一 2011.3 2,3,4 次宗谷、87 歳
鈴木 馨 2012.04.27 6 次宗谷、82 歳

印部英一 2012.6.30 1 夏,4 夏,7 冬 87 歳
清水 弘 2012.7.24 11 冬、雪氷、85 歳
安井和憲 2012.8.28 7,8 次ふじ 70 歳

*** 南極教室委員会からの報告 ***

白瀬南極出前講座

南極教室委員会では、白瀬日本南極探検隊 100 周年記念事業の一環として小中学校を対象として「白瀬南極出前講座」(南極教室)を実施しました。しかし、学校等では既に当年のカリキュラムが決まっていたため各支部への対応が遅れてしまい大変ご迷惑おかけしましたが、結果的には12校の小中学校等で実施することができ、特に北海道支部では9校の小中学校で実施されました。

昨年のテレビドラマ「南極大陸」の効果もあって南極に対する関心が高まっている中、子供達は「宗谷」「昭和基地」「タロ、ジロ」はよく知っているが、100年も前に日本の白瀬南極探検隊が小さな木造船で南極に挑んだという事実とは余り知られていなかったと思う。今回の「白瀬南極出前講座」によって子供達が白瀬隊の偉業を確

認したということは大変有意義であったと思われます。なお今回の出前講座を受けた子供達は教職員を含めて2,241名であった。



白瀬南極出前講座で講演する
山口立雄氏(30次越冬)
(岡山県真庭市立中和小学校)
(文責 南極教室委員会委員長 里見 穂)

*** 広報委員会からのお知らせ ***

○ 2012年度の通信費の振込みを、よろしくお願い申し上げます。

南極OB会の運営は毎年集めさせていただいております通信費に支えられています。2012年度の通信費の振込みがまだのかたは忘れずに振り込んでください。1年分が3000円です。お問い合わせは下記の南極OB会事務局まで電話、Fax、メールをお願いします。なお、電話でのお問い合わせは、水曜日と金曜日の午後をお願いします。

○第54次南極地域観測隊壮行会のお知らせ

来る11月2日(金)18時30分竹橋のパレスサイドビル7階、レストラン「アラスカ」パレスサイド店で開催します。なお、詳細は同封の別刷り資料をご覧ください。

○南極OB会名入りカレンダー販売のお知らせ

今年も2013年の南極OB会名入りカレンダーを販売します。1部1000円です。購入方法などの案内がこの会報に同封されているので参考にしてください

○16号訂正

23ページ新刊紹介の「南極気球ものがたり」の添え書きカッコ内の発行年月日、2021年9月は2011年9月の誤りです。お詫びして訂正いたします。

南極OB会事務局 〒101-0065 東京都千代田区西神田2-3-2 牧ビル301

電話 : 03-5210-2252 FAX : 03-5275-1635

E-Mail Address : nankyoku-ob@mbp.nifty.com

南極OB会ホームページ : <http://www.jare.org/>
